慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴木鴻一郎著 一途の人 : 東大の経済学者たち ; 水田洋 ある精神の軌跡
Sub Title	Koichiro Suzuki, Ichizu no hito : the economists of Univ. of Tokyo ; Hiroshi Mizuta, Aru seishin no kiseki
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.6 (1978. 12) ,p.1050(138)- 1051(139)
JaLC DOI	10.14991/001.19781201-0138
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781201-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

すめられている（雑誌に限っていえば Archiv für Sozialgeschichte 誌や Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte 誌などに関連論文が多い）し，またシュヴァイツァーやメイソンの批判的研究もあらわれている。しかしだからといって本書でシェーンボウムが提起した，ナチス社会を「階級とステイタス」の観点から分析する研究視角の重要性までが減じるわけではない。この視角にたって，第三帝国において「二重革命」がおこなわれたこと，その結果，従来の理論によっては把握しえない状況がうまれたことを主張する本書は――訳者もいわれているように――今なお問題提起の書としての意味を失っていないといえよう。とくに日本において殆んど未開拓であるナチス社会の研究に際してシェーンボウムの研究視角は重要な役割をはたしうるはずであり，われわれは本書をその最大のメリット以外のところで「克服」してしまってはならないであろう。

最後に本書の問題点をあげておこう。シェーンボウムの「二重革命」論は手段と目的の革命，「現実の世界」と「ナチの世界」における相互に反対の方向性をもつ「革命」の結びつきとしてとらえられているわけだが，その結びつきの在り方，両世界の関連の説明が十分になされているとはいえない。魅力ある主張だけに惜しまれるところである。

蔭山　宏
（慶應義塾大学法学部専任講師）

鈴木鴻一郎

『一途の人―東大の経済学者たち』

水田洋『ある精神の軌跡』

随想を読むのは楽しい。随想を書くこともまた楽しいはずだが，残念ながらその楽しみがわかるほど書いた経験がないので，今のところは何ともいうことができない。

私にとって随想を読むことの楽しさの意味は，専門書を読むことや原稿の執筆に疲れたとき，座右にこれをおいて時折開き，つい面白くなってひき込まれてしまうことのうちにある。随想といってもいろいろあるが，自叙伝風のものや自分の体験あるいは思想の遍歴を語るものに私はよりひきつけられる。鈴木鴻一郎，水田洋両教授の御著書は，お二人が高名な経済学者であり，筆者の専攻に近いこともあって，きわめて興味深く読ませていただいた。もちろんおなじく自己を語りながら，この二書には大きな違いがあることを読了後感じた次第である。

『一途の人』は，副題にもあるように，著者が大原社会問題研究所および東京大学経済学部に奉職中，直接指導あるいは影響をうけられた高野岩三郎，櫛田民蔵，大内兵衛，向坂逸郎，宇野弘蔵，矢内原忠雄，舞出長五郎，有沢広巳の諸氏，そしてそのほかに河上肇，楊井克巳，岡崎三郎および武田隆夫の諸氏をも語っておられる。

著者はその誠実なお人柄の故にか，このいずれの方々からもそれぞれさまざまな面で指導され，あるいは感化をうけたことを率直に語っておられる。しかし何といっても宇野弘蔵，大内兵衛および高野岩三郎の三先生の影響が圧倒的であったことが感じられる。誤まりをおそれずにいえば，著者は，高野さんからは学問研究における囚われざる精神を，大内さんからはマルクス主義者としての誠実さを，そして宇野さんからは経済学者としての理論的な厳密性の追求を，貪欲に学ばれたに違いない。そしてさらにこれら12人の方々を語り，そのいわば共通項として，『一途の人』を導き出され，しかもこれらの方々を語りながら，実は著者自身を語っている点で，この試みは成功しているといえよう。

しかし私は本書について，つぎのような感想を抱いている。本書は，著者が折りにふれて書かれた想い出や随想，あるいは追悼文もしくは経済学部長として，退任教授への餞の言葉などから成るという制約があるためか，陽の部分が多すぎて，陰の部分，すなわち著者ご自身の主体的なコメントが非常に少ないことである。恩師や先学への限りない敬慕と一体感が滲み出ていて，それはそれなりに胸を打つが，戦前から戦後にかけての長いパースペクティヴのなかで，これらの先学の業績を再検討し，日本経済学史上における役割を明らかにするという姿勢もまた重要ではないだろうか。

とりわけ宇野理論について感ずることであるが，宇野先生は，『社会科学の根本問題』，青木書店，1966年，の第3部で，「リストとウェーバー」をとりあげ，ヴェーバーの『理想型』を批判する形で論理を展開しておられる。私は，宇野理論なるものは，ヴェーバーの社会科学方法論から非常に多くのものを学んでいるように思われる。しかしそのことを宇野さんは認めたがらないように思われる。この点，すなわち「マルクスとヴェーバー」にかんする問題関心を深めることなく

して，今後のマルクス経済学の発展はありえないように私は思う。

水田洋氏の『ある精神の軌跡』は，ある面で鈴木氏の『一途の人』とはまことに対照的である。鈴木さんは，私淑する諸先輩から何事をも学ぼうという姿勢であるのにたいし，水田さんの場合は，極端にいえば，誰からも学ばず，ほとんど独力で自分の途を歩んだという印象をうける。勿論，「誰からも学ばない」などということはあり得ないわけで，さすがに高島善哉先生，太田可男氏の影響は深刻だったことがわかる。

だが文学青年だった著者が社会科学に志して以来，実に多くの人々に直接あるいは間接的に接してきたことが物語られているが，「深刻な影響をうけた」とか，あるいは「思想的な感化をうけた」というような表現を見出すことができなかった。その意味でこの書物にはおよそ感動や感激は無縁の感情のようである。「精神の軌跡」という以上，著者の思想形成の上に大きな影を投じた人は一体誰であったのか，よくわからないが，著者はあたかも学問の花園を感動するのでもなく，さりとて失望するのでもなく，孤独な旅人のようにまことに淡々と通りすぎていく。著者にしてみると，大河内一男氏も大塚久雄氏もただ通りすがりの旅人にすぎないし，丸山真男氏も加藤周一氏も，出身中学を同じくする先輩にすぎない。

私は，著者が，精神の軌跡を描きながら，精神のそのものの成長過程を充分に語っていないのに不満を感じながら，しかもその無感動ともいえるクールさに感嘆した。その意味で私がもっとも感銘をうけたのは，著者が東亜研究所に勤務し，やがて軍属としてジャワ軍政監部調査室で活躍した時の態度である。しかも敗戦という異常な事態を迎えて，通訳官となった水田調査官の行動は，およそ日本人としてはきわめて異例に属するビヘイビアではなかったろうか。著者は事もなげに無雑作につぎのように語っている。

「じっさいに戦火を交えた部隊どうしではないことにもよるのであろうが，アーロン収容所の会田雄次の経験とちがって，ぼくは，ヨーロッパの軍隊では，捕虜でも筋のとおったことは主張できるということを経験した」(183頁)。

そこで著者は，兵隊たちのために負担の公平を主張して譲らないのである。捕虜であっても捕虜であることよりも何よりも人間であることを主張する精神，そこには，「近代人」としてのセンスをしたたかにもった個性がみられるのであって，それは，日本人にはもっとも馴染みにくい心なのではなかろうかと思う。かくして著者にはどうしても孤独の影がつきまとうのであろう。実際，通訳が戦犯として処刑されることも起りえた状況にあって，著者が保ち得たクールな姿勢は，日本人としてはまことに得難いものでありながら，また多くの反撥を呼ぶ。それはさけられない。大塚金之助先生との関係もそれであり，仕方がなかったと思う。

*　　*　　*　　*

それにしてもこの二先学の著書に接して，私は，東京大学（旧東京帝国大学）経済学部と一橋大学（旧東京商科大学）の学風の差異が微妙にわかったような気がする。

お二人ともマルクス主義研究に従事されながら，その接近の方法がまるで違うからである。東大のマルクスたちは，『資本論』に凝集化されたマルクスであり，一橋のマルクスは，マルクスの周辺をより深く掘りさげようとする点で実に対照的であり，この二著には，その対比が非常によく出ている。しかしながら両者とも，いずれも自己を語りながら，充分に自己を語っていないように思われる。鈴木先生の場合は，あまりにも強い自己抑制のために，そして水田先生の場合には，あまりにも他人にふれすぎるために……。(『一途の人』，新評論，1978，B6，342頁，2,000円，『ある精神の軌跡』，東洋経済新報社，1978，B6，235頁＋7頁，1,500円)

——1978.10.30——

飯田　鼎
(経済学部教授)